

書評03

谷岡 一郎 著・ちくまプリマー新書

『データはウソをつく』

筑摩書房 / 2007 年 5 月刊 / 169 ページ / 780 円 + 税
ISBN 978-4-4806-8759-3評者：青木 美紗
奈良女子大学 講師

私たちは日々の生活において多くのデータに触れている。インターネットの普及に伴い情報が溢れる中、入手できる、あるいは一方的に受け取るデータの量も急増した。コストをかけずに多くのデータに触れることができるのは貴重なことである反面、どのデータが信用できるものなのかを見極める力も必要になり、一步間違えれば騙され、データ発信者の思う壺という危険性も孕んでいる。数値で示されると何となくわかった気になるのだが、政治アナリストの伊藤惇夫氏が「数字は嘘をつかないが嘘つきは数字を使う」と述べたように、扱う人がいくらでも操作できるものでもある。私たちは自身でその信ぴょう性を見極めなければならない。

では、どのようにデータを見ればよいのだろうか。本書は身近な事例を取り上げながら、この問いに対するヒントを与えてくれるものである。筆者は本書を出版する前に『「社会調査」のウソ』という本を出版し、アンケート調査においてやってはいけないことを事例付きで解説している。そして本書は、その続編として、どのようにすればよいのかということを説明するために、人々が「社会」の中で「事実」を認定していくプロセスに焦点を当て（第1章）、実際の事例を提示しながら（第2章）、データの読み取り方、収集の仕方、分析方法（第3章・第4章・第5章）を学べる構成になっている。主に社会調査を扱う学生を読者層としているが、日々多くのデータに触れる市民にとっても

必要不可欠な視点を提供している。

まず第1章では、自然科学と比較しながら社会科学における「事実」とは何か、また人々（特に研究者間）においてどのようなプロセスで「事実」が認定されていくのかを解説している。ここで重要なことは、自然科学が常に同じ環境・条件で研究し白黒ははっきりさせることができるのに対し、社会を研究対象とする社会科学分野においては、時間・空間そして文化の差異があるため、同じ環境や条件を設定することが困難であり、常に蓋然性（確実性）を伴うものであるということである。したがって、このような社会科学におけるあいまいさを誤用あるいは悪用するデータ発信者が存在してしまうことを筆者は忠告している。そしてその典型例がメディアであるという。

そこで第2章では、「マスコミはいかに事実をねじ曲げるのか」について、①世論の誘導、②意図的な省略と曲解、③表現と誘導、④データの誤用と悪用、⑤相関と因果の5つの観点から説明している。マスコミは自分たちの立場を主張するために、何回も同じことを繰り返して報道したり（①）、不都合な情報は敢えて報道しないようにしたり（②）、グラフや数値で見え方を変えたり（③）、方法論を提示せずにデータを都合よく利用したり（④）、相関と因果を混同させるように情報を流したり（⑤）という手段を用いることが多いという。したがって、受け取る側としては、その情報発信者がどのよ

うな立場にあるのかを知った上で、同じ内容のものでも複数社の記事を比較し、自分で他に可能性はないのかを常に考え、疑い判断することが重要であると指摘している。

第3章では、データを見極めるためには実際にデータを収集し分析してみるとわかることが多いということで、「カフェインの取りすぎは心臓に悪いのか」という課題でデータ収集と分析の方法、すなわち社会調査を実施する上での基本的なプロセスを示している。コンピューターが発展した今日、データ分析は簡単にできるようになったが、それを使いこなす知識と倫理観を持たない人が、カッコよくみえる分析をしているケースも多いため、データの収集と分析方法を知っておくことが適切なデータかどうかを見抜くためには必要になる。また、めまぐるしく変化する社会において、数値で計測できないものがあることを認め、むしろ計測できるものの方が少ないことを認識しておくことも忘れてはならないと述べている。

続く第4章では、データを収集するための質問票の作成方法について書かれている。質問票も実際に作成してみると考えなければならない(配慮しなければならぬ)ことが多く非常に難しいことに気づく。各設問が妥当性(ある変数の測定に関する内容が適切かどうか)を伴うか、用語や説明文はわかりやすいか、選択肢は適切か、誘導的な設問になっていないか、設問の順序は各設問の回答に影響しないか、そしてレイアウトは見やすいものになっているか、など質問票を実際に作成する上での基礎事項を示してくれている。

そして第5章では、インターネットの普及によって格段に増加したデータや情報をうまく使いこなすために前提として必要な能力を提示している。筆者が考える必要な能力とは、①基礎となる教養、②事実や数字を正しく読むための能力である「リサーチ・リテラシー」、そして③膨大な情報の中から本物を嗅ぎ分ける総合的

な思考能力である「セレンディピティ」の3つであるという。まず基礎となる教養は、学校で習う知識だけにとどまらず、世の中すべての出来事や知識のことである。次に「リサーチ・リテラシー」は、第1章から第4章までの知識を持ち、数字を利用してウソをつく人を見分ける能力であり、「ツッコミを入れる能力」である。もしこの能力がなければ、データを間違って解釈することになり、他人のウソを見抜けないことが生じる可能性が高いと指摘している。そして「セレンディピティ」は、辞書的には「掘り出し物を見つける才能」と説明され、必要なものだけでなく不要なものを嗅ぎ分ける能力であると筆者は考えている。この「セレンディピティ」能力を鍛えるためには、とにかく「考えるくせ」をつけることが必要であるという。さらに、発信される情報だけでなく、むしろ発信されない情報にこそ注意を向けることが重要であると指摘する。

以上のことを踏まえ、筆者は以下のようにまとめている。数字は有力な補強材ではあるが、決して過信しないこと、それだけに頼らないこと、そして常に疑うことがデータを受け取る側には求められる。そのためには、常に日ごろから自分で考え、自分で決断し、そして自分で実際にチャレンジすることが重要であると提言している。このことは、データが溢れている現代社会で生活するすべての人々に共通していえることであるだろう。

このように本書は、データや数値をどのように読み解けばよいのか、またそのためにはどのような能力が必要なのかをわかりやすく教えてくれるものであり、情報社会に生きる私たちにとって必読書ではないだろうか。悪意のある情報発信者に騙されないためにも、是非ご一読いただき、自分で考え判断し、可能であれば実践することに挑戦してみてもはどうだろうか。